

Complexity of Lattice Problems

— A Cryptographic Perspective —
D. Micciancio & S. Goldwasser

5 Sphere Packings (球充填)

問題 格子点間の最小距離が λ 以上であるとき, 半径 ρ の n 次元球の内部の格子点の最大可能個数はいくらか.

この問題の答は λ/ρ にのみ依存する.

(自明な) 事実

- λ/ρ が十分大きいとき, 定数個の点しか詰め込めない.
 - $\lambda/\rho > 2$ のとき 1 個. $\lambda/\rho = 2$ のとき 2 個.
- $\lim_{n \rightarrow \infty} \lambda/\rho = 0$ のとき, 指数的に多くの点が詰めに入る.
 - $\lambda/\rho = 2/\sqrt{n}$ のとき, 立方格子 $2\mathbb{Z}^n$ について, $\lambda = 2$. 中心 $s = (1, 1, \dots, 1)^T$, 半径 $\rho = \sqrt{n}$ の球を考える. この球を表す式は,

$$(x_1 - 1)^2 + (x_2 - 1)^2 + \cdots + (x_n - 1)^2 = n .$$

したがって, 2^n 個の点 $(2 \pm 2, 2 \pm 2, \dots, 2 \pm 2)^T$ を含む.

- 1 より大きいある λ/ρ については, n に応じて増える任意に多くの点を含む.
 - $\{x \mid x \in \mathbb{Z}^n \text{ で } \sum_{i=1}^n x_i \text{ は偶数}\}$ を考える. これは, 基底ベクトル $b_i = e_1 + e_i$ ($i = 1, \dots, n$) により生成される格子で, $\lambda = \sqrt{2}$. 中心 e_1 , 半径 $\rho = 1$ の球を考える. このとき, $\lambda/\rho = \sqrt{2}$ で, この球には $2n$ 個の点 $e_1 \pm e_i$ ($i = 1, \dots, n$) が含まれる.

次節以降で示される結果

1. $\lambda/\rho > \sqrt{2}$ のとき, 定数個の点しか詰め込めない.
2. $\lambda/\rho = \sqrt{2}$ のとき, 詰めに入る点の最大個数は $2n$.
3. 任意の $\lambda/\rho < \sqrt{2}$ について, 次元に関して指数的に多くの点が詰めに入る.

上の 1, 2 は格子点でない場合も成立する.

5.1 Packing Points in Small Spheres

$\lambda/\rho \geq \sqrt{2}$ の場合について

- 格子点という制約を考えない。(上界なので、格子点の場合にも成立)
- 一般性を失うことなく、 $\lambda = 2, \rho \leq \sqrt{2}$ と仮定。

定理 5.1 任意の $\rho < \sqrt{2}$ について、半径 ρ の球に詰め込むことのできる、互いの最小距離が 2 の点の最大数は $\lfloor 2/(2 - \rho^2) \rfloor$ である。

証明 $\mathbf{x}_1, \mathbf{x}_2, \dots, \mathbf{x}_N$ を以下を満たすベクトルの集合とする。

- $\|\mathbf{x}_i\| \leq \rho$
- $i \neq j$ のとき $\|\mathbf{x}_i - \mathbf{x}_j\| \geq 2$

このとき

$$\begin{aligned} 4N(N-1) &\leq \sum_{i=1}^N \sum_{j=1}^N \|\mathbf{x}_i - \mathbf{x}_j\|^2 = \sum_{i=1}^N \sum_{j=1}^N (\|\mathbf{x}_i\|^2 + \|\mathbf{x}_j\|^2 - 2\langle \mathbf{x}_i, \mathbf{x}_j \rangle) \\ &= \sum_{i=1}^N \left(N\|\mathbf{x}_i\|^2 + \sum_{j=1}^N \|\mathbf{x}_j\|^2 - 2\langle \mathbf{x}_i, \sum_{j=1}^N \mathbf{x}_j \rangle \right) \\ &= 2N \sum_{i=1}^N \|\mathbf{x}_i\|^2 - 2 \left\| \sum_{i=1}^N \mathbf{x}_i \right\|^2 \leq 2N^2 \rho^2 \end{aligned}$$

したがって、 $2(N-1) \leq N\rho^2$ で、 N は整数だから、定理が成り立つ。 \square

定理 5.2 半径 $\sqrt{2}$ の n 次元球に詰め込むことのできる、互いの最小距離が 2 以上の点の最大数は $2n$ である。

証明 n に関する帰納法。 $n = 1$ のときは明らか。ある n について成立を仮定して、 $n+1$ の場合を考える。

$\mathbf{x}_1, \mathbf{x}_2, \dots, \mathbf{x}_N \in \mathbb{R}^{n+1}$ を以下を満たすベクトルの集合とする。

- $\|\mathbf{x}_i\| \leq \sqrt{2}$
- $i \neq j$ のとき $\|\mathbf{x}_i - \mathbf{x}_j\| \geq 2$

$i \neq j$ のとき、

$$\langle \mathbf{x}_i, \mathbf{x}_j \rangle = \frac{1}{2}(\|\mathbf{x}_i\|^2 + \|\mathbf{x}_j\|^2 - \|\mathbf{x}_i - \mathbf{x}_j\|^2) \leq \frac{1}{2}(2 + 2 - 4) = 0$$

なので、任意のベクトルの組の間の角度は $\pi/2$ 以上。

$\mathbf{x}_N \neq \mathbf{0}$ に注意して ($\mathbf{x}_N = \mathbf{0}$ なら、最小距離が 2 以上とならない)、

$$\mathbf{x}'_i = \begin{cases} \langle \mathbf{x}_N, \mathbf{x}_N \rangle \mathbf{x}_i - \langle \mathbf{x}_i, \mathbf{x}_N \rangle \mathbf{x}_N & \text{if } \langle \mathbf{x}_N, \mathbf{x}_N \rangle \mathbf{x}_i \neq \langle \mathbf{x}_i, \mathbf{x}_N \rangle \mathbf{x}_N \\ \mathbf{x}_i & \text{otherwise} \end{cases}$$

を定義し、 $\mathbf{x}''_i = \sqrt{2}\mathbf{x}'_i / \|\mathbf{x}'_i\|$ とする。このとき、以下が成立することが確認できる。

- $\|\mathbf{x}_i''\| = \sqrt{2}$ かつ, $i \neq j$ のとき, $\|\mathbf{x}_i'' - \mathbf{x}_j''\| \geq 2$
- $\mathbf{x}_i'' = \pm \mathbf{x}_N''$ または $\langle \mathbf{x}_i'', \mathbf{x}_N'' \rangle = 0$

$\mathbf{x}_1'', \dots, \mathbf{x}_N''$ は, 高々2個を除いて, \mathbf{x}_N と直交する n 次元部分空間に存在するので, 帰納法の仮定より, $N \leq 2(n+1)$. \square

5.2 The Exponential Sphere Packing

$\lambda/\rho < \sqrt{2}$ の場合について

- 任意の ℓ_p ノルムを仮定 ($p \geq 1$)

$$\|\mathbf{x}\|_p = \left(\sum_i |x_i|^p \right)^{1/p}$$

5.2.1 The Schnorr-Adleman prime number lattice

補題 5.3 a_1, \dots, a_k を互いに素な正の奇数の列とする. 任意の ℓ_p ノルムと任意の実数 $\alpha > 0$ について,

$$\tilde{\mathbf{L}} = \begin{pmatrix} \sqrt[p]{\ln a_1} & 0 & 0 \\ 0 & \ddots & 0 \\ 0 & 0 & \sqrt[p]{\ln a_k} \\ \alpha \ln a_1 & \cdots & \alpha \ln a_k \end{pmatrix} \in \mathbb{R}^{(k+1) \times k}$$

の列により生成される格子のすべての非零ベクトルの ℓ_p ノルムは $\sqrt[p]{2 \ln \alpha}$ より大きい.

証明 すべての非零整数ベクトル $\mathbf{z} \in \mathbb{Z}^k$ について, $\|\tilde{\mathbf{L}}\mathbf{z}\|_p^p > 2 \ln \alpha$ を示す. 必ずしも自明ではないが, 単に計算による証明なので省略. \square

格子の最短ベクトルの長さを大きくする自明な方法は, すべての座標を α 倍すること. 一方, $\mathcal{L}(\tilde{\mathbf{L}})$ では, 最後の座標のみ α 倍することで長さが大きくなる. ただし, α の対数.

5.2.2 Finding clusters

$$\tilde{\mathbf{s}} = \begin{pmatrix} 0 \\ \vdots \\ 0 \\ \alpha \ln b \end{pmatrix} \in \mathbb{R}^{k+1}$$

を中心とする球に含まれる格子点の個数を考える. a_i の部分集合の積で b が近似できるとき, $\tilde{\mathbf{s}}$ に近い格子点が存在することを示す.

補題 5.4 $\tilde{\mathbf{L}}, \tilde{\mathbf{s}}$ を先の定義のとおりとする。任意の ℓ_p ノルム、実数 $\alpha, b \geq 1$ 、正整数 $a_1, \dots, a_k, z \in \{0, 1\}^k$ について、 $g = \prod_i a_i^{z_i} \in [b, b(1 + 1/\alpha)]$ ならば、

$$\|\tilde{\mathbf{L}}z - \tilde{\mathbf{s}}\|_p \leq \sqrt[p]{\ln b + 2}$$

が成立する。

証明 単に計算による証明なので、省略。 \square

$0 < \epsilon < 1$ について $\alpha = b^{1-\epsilon}$ とすると

1. 補題 5.3 より、格子点間の最小距離は $\lambda = \sqrt[p]{2(1-\epsilon)\ln b}$ より大きい。
2. 補題 5.4 より、区間 $[b, b + b^\epsilon]$ が多数の $\prod_{i \in S} a_i$ ($S \subseteq \{1, \dots, k\}$) を含めば、 $\tilde{\mathbf{s}}$ から $\sqrt[p]{\ln b + 2} \approx \lambda / \sqrt[p]{2}$ 以内の距離に多数の格子点が存在する。

a_1, \dots, a_k を最初の k 個の奇素数とすれば、上記 2 の前提条件は、

区間 $[b, b + b^\epsilon]$ が多数の無平方で a_k -smooth な奇数を含めば

となる。以下では、この前提条件が、どのような k, b について成立するかを考える。

補題 5.5 任意の実数 $\epsilon \in [0, 1)$, $\mu > 1$ と、任意の整数 $H \geq 1$ と、任意の有限集合 $M \subset [1, \mu)$ について、 b が M から無作為に選択されるとき、

$$\Pr \left[|[b, b + b^\epsilon) \cap M| < H \right] < \frac{\mu^{1-\epsilon} \cdot H}{\kappa(\epsilon) \cdot |M|}$$

が成立する。ここで $\kappa(\epsilon) = 1 - 2^{\epsilon-1}$ である。

証明 集合 B を以下のように定義する。

$$B = \left\{ b \mid b \in M \wedge |[b, b + b^\epsilon) \cap M| < H \right\}$$

次に示すとおり、 B は $(H-1)$ 個以下の要素からなる $K < \mu^{1-\epsilon}/\kappa(\epsilon)$ 個の集合に分割できる。したがって、 b が M から無作為に選択されるとき、

$$\Pr \left[|[b, b + b^\epsilon) \cap M| < H \right] = \Pr[b \in B] = \frac{|B|}{|M|} < \frac{\mu^{1-\epsilon} \cdot H}{\kappa(\epsilon) \cdot |M|}$$

分割法は以下のとおり。

1. $[1, \mu)$ を $[2^m, 2^{m+1})$ に分割。 $m = 0, 1, \dots, \lceil \log_2 \mu \rceil - 1$ 。
2. 各 $[2^m, 2^{m+1})$ を大きさ $2^{\epsilon m}$ の $2^m/2^{\epsilon m}$ 個の区間に分割。

上記 2 で得られる各区間は、ある $y \leq x^\epsilon$ について $[x, x+y)$ と表される。したがって、各区間は B の元を高々 $H-1$ 個しか含まない（さもないと B の定義に矛盾）。2 で得られる区間の総数 K について、 $K < \mu^{1-\epsilon}/\kappa(\epsilon)$ が成立することは、単純な数え上げで確認できる。 \square

系 5.6 すべての実数 $0 < \epsilon < 1$ と $\delta > 0$ に対し, 任意の十分大きな整数 h について以下を満たす定数 c が存在する.

$k = h^c$ とし, 最初の k 個の奇素数を a_1, \dots, a_k とする. また,

$$M = \left\{ \prod_{i \in S} a_i \mid S \subset \{1, \dots, k\} \wedge |S| = h \right\}$$

とする. b が M から無作為に選択されるとき,

$$\Pr \left[|[b, b + b^\epsilon) \cap M| < h^{\delta h} \right] < \frac{1}{2^h}$$

が成立する.

証明 ϵ, δ について, c を $c > (1+\delta)/\epsilon > 1$ なる整数とする. $\mu = a_k^h$ とすれば, $M \subset [1, \mu)$. また,

$$|M| = \binom{k}{h} = \prod_{i=0}^{h-1} \frac{k-i}{h-i} \geq \prod_{i=0}^{h-1} \frac{k}{h} = \frac{k^h}{h^h} = h^{(c-1)h}$$

である (上の不等号は $k \geq h$ より).

$$\Pr \left[|[b, b + b^\epsilon) \cap M| < h^{\delta h} \right] < \frac{a_k^{(1-\epsilon)h} \cdot h^{\delta h}}{\kappa(\epsilon) \cdot h^{(c-1)h}}$$

素数定理より, $a_k = O(k \ln k) = O(h^c \ln h)$. また, $\kappa(\epsilon) = 1 - 2^{\epsilon-1}$.

$$\begin{aligned} \Pr \left[|[b, b + b^\epsilon) \cap M| < h^{\delta h} \right] &< \frac{O(h^c \ln h)^{(1-\epsilon)h} \cdot h^{\delta h}}{h^{(c-1)h}} \\ &< \left(\frac{O(\ln h)}{h^{\epsilon c - (1+\delta)}} \right)^h < \frac{1}{2^h} \end{aligned}$$

□

定理 5.7 すべての実数 $0 < \epsilon < 1$ と $\delta > 0$ に対し, 以下を満たす定数 c が存在する.

- h を十分大きな正整数とし, $k = h^c$ とする.
- 最初の k 個の奇素数を a_1, \dots, a_k とする.
- b を $\{a_1, \dots, a_k\}$ から無作為に選択した h 個の素数の積とする.
- $\alpha = b^{1-\epsilon}$ とし,

$$\tilde{\mathbf{L}} = \begin{pmatrix} \sqrt[p]{\ln a_1} & 0 & 0 \\ 0 & \ddots & 0 \\ 0 & 0 & \sqrt[p]{\ln a_k} \\ \alpha \ln a_1 & \cdots & \alpha \ln a_k \end{pmatrix} \quad \tilde{\mathbf{s}} = \begin{pmatrix} 0 \\ \vdots \\ 0 \\ \alpha \ln b \end{pmatrix}$$

とする.

- $\tilde{r} = \sqrt[p]{(1+\epsilon) \ln b} > 1$ とする.

このとき

1. $\mathcal{L}(\tilde{\mathbf{L}})$ のすべての非零ベクトルの ℓ_p ノルムは $\sqrt[p]{2\left(\frac{1-\epsilon}{1+\epsilon}\right)\tilde{r}}$ より大きい.
2. 少なくとも $1 - 2^{-h}$ の確率で, 球 $\mathcal{B}(\tilde{s}, \tilde{r})$ に, $h^{\delta h}$ 個以上の格子点 $\tilde{\mathbf{L}}z$ が含まれる. ただし, $z \in \{0, 1\}^k$ で丁度 h 個の 1 を持つ.

証明 補題 5.3, 補題 5.4, 系 5.6 から直ちに導かれる.

系 5.8 任意の $0 < \gamma < \sqrt{2}$ に対して, 以下を満たす定数 $0 < \epsilon < 1$ が存在する.

任意の十分大きな正整数 k について, 最小距離が λ の階数 k のある格子 $\tilde{\mathbf{L}}$ とある点 \tilde{s} が存在して, 球 $\mathcal{B}(\tilde{s}, \lambda/\gamma)$ が $2^{k\epsilon}$ 個の格子点を含む.

証明 定理 5.7 で, $p = 2$ とし, $\gamma = \sqrt{2\left(\frac{1-\epsilon}{1+\epsilon}\right)} < \sqrt{2}$ となるよう ϵ を決める. したがって, $\epsilon = \frac{2-\gamma^2}{2+\gamma^2}$.

5.2.3 Some additional properties

この節の内容は, この本の他の部分では利用されないので, 省略して差し支えない.

命題 5.9 $\tilde{\mathbf{L}}$ の行列式は

$$\sqrt{\left(1 + \alpha^2 \sum_{i=1}^k \ln a_i\right) \prod_{i=1}^k \ln a_i}$$

定義 5.1 x を任意の (正の) 實数とし, p/q を有理数とする. $|p - qx| < \delta$ のとき, p/q を x のディオファントス δ 近似と呼ぶ.

命題 5.10 $\alpha > 0$, $b > 0$ を任意の正の定数とする. 任意の整数ベクトル z について, $\|\tilde{\mathbf{L}}z - \tilde{s}\|_1 < \ln b$ ならば, $\prod a_i^{z_i}$ は b のディオファントス b/α 近似である.

命題 5.10 は補題 5.4 の逆. 一般の ℓ_p ノルムについても同様の結果が成立する.

5.3 Integer Lattices

$\tilde{\mathbf{L}}$ と \tilde{s} の適当な整数近似についても, 前節と同様の結果が得られることを示す.

補題 5.11 すべての $\eta \geq 1$ とすべての整数ベクトル $z \in \mathbb{Z}^k$ について,

$$\|\mathbf{L}z\|_p \geq (\eta - 1)k\|\tilde{\mathbf{L}}z\|_p$$

ここで, $\mathbf{L} = \lfloor (k\eta)\tilde{\mathbf{L}} \rfloor$ は, $(k\eta)\tilde{\mathbf{L}}$ の各要素をそれに最も近い整数で置き換えて得られる行列である.

証明 単に計算による証明なので省略.

補題 5.12 すべての $\eta \geq 0$ とすべての整数ベクトル $z \in \mathbb{Z}^k$ について,

$$\|\mathbf{L}z - s\|_p \leq (\eta + 1)k\|\tilde{\mathbf{L}}z - \tilde{s}\|_p$$

ここで, $\mathbf{L} = \lfloor (k\eta)\tilde{\mathbf{L}} \rfloor$, $s = \lfloor (k\eta)\tilde{s} \rfloor$.

証明 単に計算による証明なので省略.

定理 4.5 の証明

定理 4.5 任意の $p \geq 1$, $\gamma \in [1, \sqrt[p]{2})$, $\delta > 0$ について, 整数 h が与えられたとき, 以下を満たす整数 k, r , 行列 $\mathbf{L} \in \mathbb{Z}^{(k+1) \times k}$, 整数ベクトル $s \in \mathbb{Z}^{k+1}$ を出力する確率アルゴリズムが存在する. なお, 時間計算量は h の多項式である.

1. $\mathcal{L}(\mathbf{L})$ のすべてのベクトルの ℓ_p ノルムは γr より大きい.
2. すべての十分大きな h について, 少なくとも $1 - 2^{-h}$ の確率で, 球 $\mathcal{B}(s, r)$ は少なくとも $h^{\delta h}$ 個の格子点 \mathbf{Ly} を含む. ここで, y は丁度 h 個の 1 を持つ $\{0, 1\}$ ベクトルである.

証明 1については, 定理 5.7 と補題 5.11 を用いる. 定理 5.7 より, $k = h^c$ とする. また, 補題 5.11 について, $\eta = 1/\epsilon$ とし, $r = \lceil (1 + 1/\epsilon)k\tilde{r} \rceil$ とする. ただし, ϵ は定理 5.7 の ϵ .

2については, 定理 5.7 と補題 5.12 を用いる. 1の場合と同様に, 補題 5.12 について, $\eta = 1/\epsilon$ とする. \square

5.4 Deterministic Construction

予想 1 任意の $\epsilon > 0$ に対して, ある d が存在して, 十分大きなすべての n について, 区間 $[n, n + n^\epsilon]$ に無平方で $(\log^d n)$ -smooth な奇数が存在する.

定理 4.9 予想 1 が正しければ, 任意の $p \geq 1$, $\gamma \in [1, \sqrt[p]{2})$ について, 整数 h が与えられたとき, 以下を満たす整数 $k (> h)$, r , 行列 $\mathbf{L} \in \mathbb{Z}^{(k+1) \times k}$, 整数ベクトル $s \in \mathbb{Z}^{k+1}$ を出力する決定性アルゴリズムが存在する. なお, 時間計算量は h の多項式である.

1. $\mathcal{L}(\mathbf{L})$ のすべてのベクトルの ℓ_p ノルムは γr より大きい.
2. 任意の $x \in \{0, 1\}^h$ に対して, ある $y \in \{0, 1\}^{k-h}$ が存在して, $\mathbf{L}(y^T, x^T)^T$ が球 $\mathcal{B}(s, r)$ に含まれる.

証明 $0 < \epsilon < 1$ を実数とする. 十分大きなすべての n について, 区間 $[n, n + n^{\epsilon/2}]$ に無平方で $(\log^d n)$ -smooth な奇数が存在するような整数 d を考える (予想 1).

$k = h^{d+1} + h$ とし, a_1, \dots, a_k を最初の k 個の奇素数, $b = a_k^{2h/\epsilon}$, $\alpha = b^{1-\epsilon}$ とする. k が h の多項式であることに注意する.

補題 5.3 より, すべての $z \in \mathbb{Z}^k \setminus \{\mathbf{0}\}$ について

$$\|\tilde{\mathbf{L}}z\|_p \geq \sqrt[ph]{2(1 - \epsilon) \ln b}$$

が成立する。

以下では、すべての $\mathbf{x} \in \{0, 1\}^h$ に対して、

$$\left\| \tilde{\mathbf{L}} \begin{pmatrix} \mathbf{y} \\ \mathbf{x} \end{pmatrix} - \tilde{\mathbf{s}} \right\|_p < \sqrt[p]{\ln b + 2}$$

を満たす $\mathbf{y} \in \{0, 1\}^{h+1}$ が存在することを示す。

$g_{\mathbf{x}} = \prod_{i=1}^h (a_{h+1+i})^{x_i}$ とおくと、

$$\frac{b}{g_{\mathbf{x}}} > \frac{b}{a_k^h} = a_k^{(2/\varepsilon-1)h} > 2^h$$

したがって、十分大きなすべての h について、区間 $[b/g_{\mathbf{x}}, b/g_{\mathbf{x}} + (b/g_{\mathbf{x}})^{\epsilon/2}]$ に無平方で $\log^d(b/g_{\mathbf{x}})$ -smooth な奇数が存在する。ところで、素数定理より $a_k = O(k \ln k)$ なので、

$$\log^d(b/g_{\mathbf{x}}) \leq \log^d b = O(h \log h)^d < h^{d+1}$$

である。したがって、この奇数は、ある $\mathbf{y} \in \{0, 1\}^{h+1}$ を用いて、

$$g_{\mathbf{y}} = \prod_{i=1}^{h+1} a_i^{y_i}$$

と表すことができる。 $g_{\mathbf{y}} \in [b/g_{\mathbf{x}}, b/g_{\mathbf{x}} + (b/g_{\mathbf{x}})^{\epsilon/2}]$, $g_{\mathbf{x}} \leq a_k^h = b^{\epsilon/2}$ より、

$$g_{\mathbf{y}} g_{\mathbf{x}} \in [b, b + b^{\epsilon/2} g_{\mathbf{x}}^{1-\epsilon/2}] \subset [b, b + b^{\epsilon}]$$

が成立するので、補題 5.4 より、

$$\left\| \tilde{\mathbf{L}} \begin{pmatrix} \mathbf{y} \\ \mathbf{x} \end{pmatrix} - \tilde{\mathbf{s}} \right\|_p < \sqrt[p]{\ln b + 2}$$

が成立する。 $r = \sqrt[p]{\ln b + 2}$ として、

$$\frac{\sqrt[p]{2(1-\epsilon)\ln b}}{r} = \sqrt[p]{2} \left(\frac{(1-\epsilon)\ln b}{\ln b + 2} \right)^{1/p} > \lambda$$

を満たすように ϵ を選ぶ。 \mathbf{L}, \mathbf{s} は、補題 5.11 と補題 5.12 を用いて得ることができる。□

5.5 Notes

省略